様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　５日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22652078
研究課題名（和文）
セネガルのイスラーム神秘主義教団ニアセンの研究
研究課題名（英文）
A study of the Niassene branch of the Tijani sufi brotherhood in Senegal
研究代表者
盛　恵子（MORI KEIKO）
名古屋大学・文学研究科・研究員
研究者番号：30566998

研究成果の概要（和文）：
ニアセン教団は、1930 年代にウォロフの学者イブラヒマ・ニアスによって、イスラーム神秘主義教団ティジャーニー教団のブランチとして、セネガルのサールム地方で成立した。ニアセン教団は、サールム地方の多数派であるセレールの間に多くの信徒を持つと同時に、ナイジェリア、モーリタニアなど西アフリカ諸国に多くの信徒を持つ。国内のセレールにとってニアセン教団は、彼らのエスニシティを汲み上げてイスラームの領域の中で維持するという側面と、彼らを、人種、民族、国境を超越した世界市民的なイスラーム共同体という普遍性に向かって開くという 2 つの対極的な機能を持つ。世界市民の意識はおそらく、ニアセン教団独自のタルビーヤによって信徒にもたらされる、この世のすべては神の光であり、自己と他者の区別はないという意識を土台とするのではないかと考えられる。

研究成果の概要（英文）：
In the 1930's, Ibrahima Niass, a wolof savant, founded the Niassene order, one of the branches of the Tijani sufi brotherhood, in the region of Saloum in Senegal. The followers are not only the sereer ethnic group which is the majority of people in the region, but also foreigners of West African nations, including many Nigerians and Mauritanians.
The branch, on the one hand, integrates the ethnicity of the sereer people with the senegalese musulman society and on the other hand introduces them to the cosmopolitan universality of islamic community which makes them cross the borders of race, ethnicity and national boundary.　Enlightenment that all things in the world are God's light and there is no distinction between one's self and the other's is received by the Niassene initiates in the unique method of educational task ('tarbiya'). I think this new systematic religious method brings about their cosmopolitanism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	900,000	0	900,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	2,200,000	390,000	2,590,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：イスラーム神秘主義、ニアセン教団、セネガル、セレール、セレール・ニョーミンカ、世界市民、イブラヒマ・ニアス

１．研究開始当初の背景

私は 2000 年から、ムスリムが人口の約

95%を占めるセネガルにおいて、イスラーム神秘主義教団の調査を行ってきた。セネガルではフランス統治下に、セネガル人によってムリッド、ライエン、そしてこの研究の主題であるニアセンというイスラーム神秘主義教団が創設された。これらの教団の創設以前に、セネガルにはすでに、ハーディルとティージャーニーという外来のイスラーム神秘主義教団が導入されていたのだが、なぜセネガル人は新たにイスラーム神秘主義教団を作り出したのか、そしてなぜそれらが、外来の教団を凌いでセネガル人ムスリムの支持を獲得し、急速に発展したのかという問題がある。後述するようにニアセンはティジャーニー教団のひとつのブランチなのだが、従来にない新しい修行法と方向性を打ち出すことによって、他のティジャーニー教団のブランチとはたいへん異なる存在である。

現在セネガルのムスリムの約半数がその信徒であるといわれるムリッド教団は、1971年のクルーズ・オブライエンの研究によって有名なのだが、彼はこの研究によって、ムリッド教団の信仰と慣習には、それが創設されたセネガルのバオル地方に住む農民であるウォロフ民族の伝統文化と心性が反映されていることを示した。また私の調査したライエン教団は、セネガルの首都ダカールとその周辺の本来の住民である漁民レブーが創設したものだが、この教団は、教団創設者は預言者ムハンマドの生まれ変わりであり、彼の長男はイエス・キリストの生まれ変わりであるという一見異端的な信仰を持つ。しかしこの信仰は、レブー社会の文化の特性とレブーの歴史的・政治的・経済的背景とに照らし合わせた場合、実はレブーにとって、イスラームの普遍主義を手段としたエスニシティの発現であり、ライエン教団の成立と発展は、レブーにエスニシティの維持と救済をもたらす千年王国運動的な意義を持つことが明らかになった(この詳細は、2012 年に著書として発表した)。

つまり私にとって関心があるのは、セネガル人にとってのイスラームの主体的意義である。従来のセネガルのイスラーム神秘主義教団研究は、政治学者・経済学者によって、教団の政治的・経済的影響力の巨大さを関心の焦点として行われがちであったために、イスラームが魂の救済装置であるという視点が希薄だった。しかしイスラームが、その発祥の地であるアラブ文化圏を越えて拡大したことを思えば、イスラーム神秘主義教団の研究は、独自の歴史的体験と文化とを持つ個々の民族集団の、しかも個々の信徒の宗教意識・生活感情に即して行われるべきである。このような視点に立ったイスラーム研究の蓄積が、現象としてのイスラームの理解に繋がり、また現在特に欧米で社会問題化している、イスラームを過激原理主義者のテロリズムと短絡的に同一視し排斥するたぐいの偏向を正すことに繋がると考えられるからである。

２．研究の目的

ニアセンは、アルジェリアで生まれモロッコで没した神秘家アフマド・ティジャーニー(1737/8-1815)が創設したティジャーニー教団のブランチであり、ウォロフ民族の学者イブラヒマ・ニアス(1900-1975)によって、植民統治下の商業都市カオラックで創設された。ニアセンは 1940 年代から西アフリカ全域に急速に拡大し、20 世紀における最も大規模な宗教運動として注目に値する。

1929 年頃にイブラヒマ・ニアスは、自分は、後述するグノーシス的な神的な光の奔流ファイダを受け取ったと宣言した。彼は、自分からファイダを受け取る者は誰でも、神が何であるかを知ることができると主張して、神を知る(*xam yàlla*)ための宗教教育タルビーヤの新しい方法を案出した。しかしイブラヒマの主張と彼の案出したタルビーヤの方法は、ティジャーニー教団の他のすべてのブランチから否定されており、ニアセンはティジャーニー教団とは別の教団であるとみなされる場合もある。

ニアセンの信徒はセネガル国内よりも、ナイジェリア、ガーナ、ガンビア、モーリタニアなど、西アフリカ諸国に多い。そしてセネガル国内では、サールム地方に優越する民族である農民セレールと漁民セレール・ニョーミンカの支持を多く集める。セレールはイスラーム化したのちも、精霊信仰を並行して行っている。本研究は、まずセネガル国内に目を向けて、地元のセレールとセレール・ニョーミンカがニアセンを受容し支持した経緯とその意味を明らかにしようとする。これは、アフリカ人によるイスラームの主体的受容、ひいては、アラブ文化圏に属さない民族にとってのイスラームの受容という問題に新しい知見を加えるものとなることが期待される。

３．研究の方法

①カオラックに住むイブラヒマ・ニアスの子孫たち、イブラヒマが生まれた村であるタイバ・ニアセンに住むイブラヒマの親族、イブラヒマが住んだ村コースィの住民に聞き取りを行い、イブラヒマの家系や彼がニアセンを創設した経緯、教団の現状を調査した。

②ニアセンの支持者が多い地域のひとつのモデルとして、カオラック近郊に位置するバダブン地方共同体を取り上げて調査を行った。この地方共同体の中心であるバダフン村のニアセン信徒である数家族で家系調査を行い、最初のニアセン信徒が精霊信仰からム

スリムに改宗した時期と経緯を調べると同時に、一般信徒レベルでのニアセンの教義の理解・解釈を調べた。
③バダブンの 37 の村の全部を巡り、それぞれの村の住民の支持する教団を調査した。ニアセン信徒が特に優越する村では、ニアセン受容の経緯を調べた。カオラックには、ニアセンの成立に先だって、ニアセンではないティジャーニー教団のブランチとムリッド教団とが布教者を派遣してセレールのイスラーム化を進めていたので、ニアセンはこれらの教団と競合関係にある。
④サールム河の河口に位置するガンドゥル諸島の、ニアセン信徒が多い村々(ニョジョール、ジョノワール、ファリア、ムンデ、ジフェール、ジャムニャージョ)を巡って、これらの村々に最初のニアセン信徒が現れた経緯や、信徒の増加の経緯を調査した。
⑤カオラック、バダフン地方共同体、そして首都ダカールで、ニアセンの独自の宗教教育タルビーヤを受けた人々30 人にインタビューを行い、タルビーヤの前後での人生観の変化について調査した。

４．研究成果

1.　ニアセンの成立

ニアセンは、セネガル中西部のカオラックで成立した。サールム河のほとりのカオラックは、植民地時代には外港と鉄道の駅が整備された交通の要衝・落花生取引の中心であり、ダカールに次ぐ第 2 の商業都市として繁栄した。カオラックがその中に位置する旧サールム王国は、精霊信仰信奉者である農民セレールの王国である。

イブラヒマ・ニアスの祖父でイスラーム学者だったママドゥは、セネガル北東部のウォロフの王国ジョロフから、1865 年頃にその息子アブドゥライを連れて、マ・バ(1809-1867)が発した軍事的ジハードの呼びかけに応えてサールムに来た。マ・バはティジャーニー教団に属すフルベの学者であり、サールムとその隣国スィンのセレールを改宗させるために軍事的ジハードを行ったが、1867 年にスィンの王の軍隊に敗れて死んだ。

アブドゥライはマ・バの死後も軍事的ジハードの継続を志し、また 1875 年にはティジャーニー教団に加入したが、1887 年頃になると平和的なイスラーム布教へと決定的な方向転換をした。アブドゥライは 1911 年にカオラックのレオナ街区に修道場を開き、1922 年に死んだ。彼の後継者である彼の長男アブドゥライ(1879-1959)は、イブラヒマがファイダの出現を主張したときそれを認めなかったので、イブラヒマは 1930 年頃に少人数の支持者を率いてレオナ街区の北東 2km にメディナという村を作り、ここにニアセン教団が成立した。

2.　農民セレールへの浸透

ニアス家のサールムへの移住の動機は、皮肉にも、マ・バに協力して武力でセレールをイスラーム化することだったのだが、セレールはマ・バの軍事的ジハードによる改宗の強制を拒否した。そして彼らはのちに、地元に住み着いたイスラーム指導者やコーラン教師たち-イブラヒマ・ニアスもその中にいた-の平和的な布教活動によって、主体的にイスラームに改宗した。少数のセレールは、キリスト教徒になった。

私はカオラックから約 7km 離れて北に広がっているバダフン地方共同体(Communauté rural de Mbadakhoun)で調査を行ない、農村に住むセレールの改宗が非常に遅かったことを確認した。この地方共同体は、2008 年にはバダフン村を中心とした 37 の農村からなる行政単位であり、面積約 170 ㎢、人口約 1.5 万人、民族構成はセレール 70%、フルベ 15%、ウォロフ 10%、その他 0.5%だった。住民の生業は、商品作物の落花生、主食の唐人稗の栽培と牧畜である。住民の大部分はムスリムだが、少数のキリスト教徒を含む。

カオラックから遠くないにもかかわらず、この地方共同体の村々の一般的な交通手段は荷車である。共同体内で最も大きいバダフン村は 2008 年に人口 724 人で、その大部分がセレールだった。バダフン村には 1988 年に水道が、1996 年に電気が引かれたが、この地方共同体の他の村々の多くには、現在も水道・電気がない。

バダフン村に住む M.N.(1937-　)はこの地方共同体の長なのだが、彼はサールム王国で王に次ぐ高官であるジャラフを出す父系リネージに属す。M.N.はカオラックへの通学途中でイブラヒマ・ニアスを知り、1949 年に改宗してニアセン信徒になったが、当時彼の父方の親族はすべて精霊信仰信奉者だった。

M.N.の改宗当時、バダフン村の住民の約半数がムスリムであり、その多くがティジャーニー教団のニアセンとは別のブランチの信徒だった。1960 年代になって、村の名士だったM.N.の父をはじめとする 5 人が改宗してニアセン信徒になり、村に信徒団ダーイラを作った。またイブラヒマ・ニアスの親族のひとりが一時この村に住み、コーラン学校を開いた。現在バダフン村の住民はすべてムスリムであり、その 8 割以上がニアセン信徒である。

他の教団の指導者たちは神の秘密を隠しておくのに、イブラヒマ・ニアスはそれを惜しみなく人々に与えたことが、セレールの民衆を惹きつけたという。これは、後述するタルビーヤへの言及である。イブラヒマはすぐれた聖者であり、彼やその子孫は神の恩寵である超自然的な力を持っているので、彼らに祈願の祈りをしてもらえば願いがすべて叶

うと信じられている。

カオラック周辺のセレールの村々へのニアセンの浸透は、イブラヒマ・ニアスが地縁血縁を駆使して行った布教活動の結果である。イブラヒマは自分の息子たちにそれぞれ地域を割り振って布教を担当させた。息子たちは担当地域の村々にニアセン信徒であるイマームを派遣したり、コーラン学校を開いたり、金曜モスクを建てたりした。バダフン地方共同体は、イブラヒマの長男でイブラヒマの初代後継者カリフ・ジェネラル(khalife général)となったアブドゥライ・ニアスの担当地域に含まれたが、その理由は、彼の母であるイブラヒマの第2妻、アストゥ・サールが生まれたンドファン・タノワール村が、この地方共同体の中にあったからである。

アストゥ・サールの同父同母の兄弟アマドゥ・サールもまた、教団の指導者すなわちムカッダムとして、この地方共同体の村々のセレールを改宗させニアセン信徒にするべく活動した。たとえば 2008 年の人口が 424 人だったンブレム村では、第二次世界大戦以降にアマドゥを介して改宗しニアセン信徒になったS.S.が、当時精霊信仰信奉者だった村人に布教し、その大部分がニアセン信徒となった。

そしてこの村には、イブラヒマ・ニアスのための畑が作られた。ンブレム村とバダフン村、その他周辺の3つの村のニアセン信徒たちがこの畑で集団労働を行って唐人稗と落花生を栽培し、収穫物はすべて、唐人稗は現物で、落花生は換金してイブラヒマに寄進した。イブラヒマはその代わりに信徒たちに、多幸を祈る祈願ニャーン(ñaan)をした。イブラヒマの死後はその長男アブドゥライへ、その死後はその息子へと収穫物を納める先は変わったが、この畑は今も続いている。このような寄進のための専用の畑を作ってそこで集団労働するのではなく、個人が自分の畑の収穫物から一定の割合を出し、それを村のダーイラがまとめて寄進するという方法を取る村々もある。

農作物のこのような寄進はバダフン地域共同体の村に限らず、またセレールの村に限らず、ニアセン信徒が住むサールムのウォロフの村々のニアセン信徒によっても行われる。しかしセレールの伝統的な農業技術は生産性が高く、ウォロフのそれに優越する。またイブラヒマ・ニアスは宗教指導者であるだけでなく商人としての才覚もあり、彼はカオラックの人口が急増した 1920 年代にカオラックの経済活動に参入し、信徒たちの村では落花生栽培を奨励した。ニアセンの発展にとって、優れた農民であるセレールが果たした経済的役割は大きいと考えられる。

加えて注目されるのは、バダフン地方共同体のセレールの信徒が、イブラヒマ・ニアスが地元のセレールへの布教を望んだ理由を、セレールが伝統的に所有するところの呪術によって雨を呼び怪我を治療するといった神秘的な力と人格的な美質とを、イブラヒマが高く評価したからだと考えていることである。セレールの信徒はアストゥ・サールを、ンブレム村の創設者であるサール姓のセレール農民と同じ一族の女性だと考えている-彼女の娘に確認したところこれは誤りで、彼女はウォロフなのだが-。そしてイブラヒマはウォロフであるのに、労働を好み、嘘をつかず、金銭を求めないというセレールの民族的な美質が自分の後継者に受け継がれてニアセンの発展に寄与することを期待して、アストゥ・サールと結婚したと説明する。またンブレムの現村長の父は神秘的な治療の力を持っており、イブラヒマは怪我をした信徒を大勢彼のもとに送って治療させたとも語られる。これらの伝承は、セレール農民がイスラームの受容をセレールの伝統的価値の放棄としてではなく、それらのイスラームの中への昇華として理解しており、またセレールは、セレールの血を受け継ぐと彼らが信じるところのイブラヒマの子孫を通じてニアセンの発展を担う者である、という誇りを自覚していることを意味するといえる。

3. 漁民ニョーミンカへの浸透

ニョーミンカはサールム河の河口に位置するガンドゥル諸島に住む漁民であり、少数のムスリムの村々が、大陸のイスラーム化したマンディングと連帯して、多数の非ムスリムの村々に対してジハードを行うという内戦を経験している。非ムスリムのニョーミンカもまた、ジハードによる強制によっては改宗せず、後に自発的に改宗した。ニョーミンカはサールム河を遡り、現在のカオラックのンダンガン街区にあたる場所で、モーリタニア人と塩の交易を行っていた。すなわちカオラックは、もとはニョーミンカの交易集落だった。そこでニョーミンカは最初期からニアセン教団と接触し、イブラヒマの信徒となる機会を持った。1932 年にジフェール出身のニョーミンカが最初にカオラックでイブラヒマに帰依し、布教に貢献した。ニョーミンカが漁舟を操り容易に島嶼部からカオラックへ出稼ぎに来ることができることも、ニョーミンカの信徒増大につながった。ここでは、カオラックの経済的・政治的求心力がニアセン教団拡大の大きな要因として働いていた。イブラヒマ・ニアス自身も、1962 年にジャムニャージョとジルンダを訪問し、直接ニョーミンカの大衆に呼びかけた。ニョーミンカのニアセン信徒たちは、ニョーミンカが最初のイブラヒマ・ニアスの信徒だったとして、イブラヒマを最初期から支持したことに誇りを持っている。ニョーミンカは、漁のための

海岸の移動を通じて、同じく海岸を移動する漁民レブーとの交流があり、レブーの中にもニアセン信徒を生じさせた。ニョーミンカの間では、イブラヒマ・ニアスが転覆した漁舟を持ち上げて乗員を救った等の奇跡譚が多く語られている。

4.　ファイダ

ファイダの観念は、ティジャーニー教団の学者ムハンマド・タイイブ・スフヤーニー(d.1843/1844)がアフマド・ティジャーニーの警句を集めた書物の中の、「ファイダが私の仲間のもとに現れるだろう。そして人々が大挙して我々の道〔スーフィー教団〕に入るだろう。このファイダは、人々が厳しい試練と苦しみを味わう時に現れるだろう」という予言に遡る。スフヤーニーはこの予言を、ファイダによって神が多くのティジャーニー信徒に対して自己を顕現する(fath)であろう、という意味に解釈していた。ニアセン信徒は、試練の時代とは、フランス統治下のセネガルの状況であるという。

ファイダ(fayda)という語は流出を意味するアラビア語の語根に由来する。ファイダは2つの概念、すなわち神の最初の創造物であるところの預言者ムハンマドの光(al-nūr al-muhammadī)の放散としての宇宙の創造と、放散の過程における神の自己顕現とを含意する。したがってファイダは、神を知ろうとする神秘家の内面的な旅(sulūk)を前進させ、神が彼に対して自らを「開き」(fath)、神の認識(ma‘rifa)を得ることを可能にする。このようにファイダは神的な光の奔流なのだが、ニアセン信徒はこれを、尽きない井戸から湧き出て全世界に広がる水の奔流とイメージする。

5. タルビーヤ

イブラヒマ・ニアスが本当にファイダを受け取ったのならば、彼は大勢のティジャーニー信徒を神の認識に到達せしめることができるはずである。イブラヒマはこれを可能にするために、新しいタルビーヤ(tarbiya)の方法を案出した。

タルビーヤという語は教育を意味するが、イスラーム神秘主義の文脈においては、神秘家が諸悪の座としての魂あるいは自己であるナフス(nafs)を純化して、完全な自己(al-nafs al-kāmila)へ到達することを目的とした宗教的訓練である。完全な自己への到達は、神との合一による自己の消滅（fanā’）によって達せられる。この瞬間は、神の知の体験(ma‘rifa)と等しい。したがってイスラーム神秘主義教団におけるタルビーヤは、師が弟子を自己の純化と神の知の体験に導くための、組織化された宗教的訓練である。

タルビーヤは師弟の間で秘密裡に行われるので、タルビーヤについて書かれた文献は少ないが、15世紀には、独居と身体的な苦行というそれまで一般的だったタルビーヤの方法が批判され始めた。ティジャーニー教団もまた、独居と苦行を伴う身体の訓練としてのタルビーヤを否定する。

イブラヒマ・ニアス以前には、タルビーヤを受けることを許されるのは少数の者のみだった。しかしイブラヒマはタルビーヤを信仰の本質的な構成要素とみなし、万人がタルビーヤを受けて信仰を完成すべきだとした。ニアセンのタルビーヤは、イブラヒマがティジャーニー教団の祈祷集から選んだいくつかの祈祷を、規定の時間に規定の回数唱えることによって行われる。

6. タルビーヤの実際

ティジャーニー教団に加入した者なら誰でも、望めば年齢を問わずタルビーヤを受けることができる。私が収集した30の事例では、最も低い年齢は14歳であり、17歳～20歳代前半で受ける者が多かった。タルビーヤの所要日数は2～3週間が多いが、3日で終わった女性もいた。タルビーヤは最長でも1ヶ月で終わり、タルビーヤを始めた者は全員神を知ることができるという。

タルビーヤはムカッダムによって行われるが、その方法は複数あり、ムカッダムによって異なる。しかし、志願者が他者との交際やTVなどの娯楽を絶ち、自室や畑の隅などで独りになり、ムカッダムから伝授された祈祷を規定の時間に膨大な回数唱え、2, 3日ごとにムカッダムのもとに行って彼から問いを与えられ、帰宅後に祈祷を唱えつつ自力で答えを考え、正しい答えを得るとムカッダムからさらに進んだ段階の別の問いを与えられる、ということを繰り返した後、最後の問いに正しく答えると、ムカッダムがタルビーヤの終了を宣言する、という過程は共通する。

私が聞き取りをした30人のニアセン信徒は、皆一様にタルビーヤはすばらしいと語った。タルビーヤを受けると、人生がすっかり変わるという。惰性で実践していただけの礼拝や断食などを行う真の意味がわかり、イスラームを正しく実践することができるようになる。自分がこの世に生まれてきたことの意味と使命がわかる。世界に生起する現象の隠された意味のすべてが理解できるようになる。人と動物とを問わず、この世のすべては神の光、神の被造物なので、自分と他者の区別はないとわかる。そして、神を知るというムスリムにとっての最終目標が今や達成されたので、たとえ日常生活が不運であれ貧困であれ、心は常に平安で幸福だという。

7. 世界市民主義

ニアセン信徒たちは、たとえバダフン地方

共同体の村々のような交通不便な寒村に住む信徒であっても、「イブラヒマ・ニアスは世界中を旅行した。だからさまざまな人種のニアセン信徒が世界中におり、彼らはイスラームを学びにメディナに来る。それはまさしく奇跡だ」と語り、自分たちがイブラヒマ・ニアスの築いた世界市民的なイスラーム共同体に属すことに強い誇りを持つ。

イブラヒマは頻繁に外遊し、西アフリカ以外に、モロッコ、エジプト、ヨルダン、イラク、パキスタン、アフガニスタン、フランスに行き、1963 年には中国にまで行った。イブラヒマは既存のイスラーム世界を越えた全世界的な布教を志し、孫であるアサン・スィセに英語を学ばせてアメリカで布教させた。イブラヒマはまた、ガーナ大統領クワメ・ンクルマ(1909-72)、ギニア大統領セク・トゥレ(1922-84)、エジプト大統領ナーセル(1918-70)などアフリカの指導者たちと交際し、また国際的なイスラーム組織に参加した。イブラヒマは、「世界はひとつの村であり、村の中では互いに皆知っている。世界もそうでなければならない」と語った。

結論

ニアセン教団は、その創設された地方の住民であるセレールのエスニシティを汲み上げてイスラームの領域の中で維持するという側面と、彼らを、人種、民族、国境を超越した世界市民的なイスラーム共同体という普遍性に向かって開くという 2 つの対極的な機能を持つことが明らかになった。世界市民の意識はおそらく、ニアセン教団独自のタルビーヤによって信徒にもたらされる、この世のすべては神の光であり、自己と他者の区別はないという意識を土台とするのではないかと考えられる。

ニアセン教団の包括的な理解のためには、次の課題として、ナイジェリア、ガーナなど、各国のニアセン信徒のさまざな領域における実践を具体的に比較調査することが必要であることが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 盛　恵子　「米をくれなきゃ地獄行き！セネガルの子供の行事タージェボン」『アリーナ』査読なし,14 巻, 2012, 232-235.

〔図書〕（計 1 件）

① 盛　恵子　『セネガル・漁民レブーの宗教民族誌 ： スーフィー教団ライエンの千年王国運動』2012, 明石書店, 総ページ数 586p.

６．研究組織

(1)研究代表者

盛　恵子（MORI KEIKO）

名古屋大学・大学院文学研究科・博士研究員

研究者番号：30566998

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし